

すでに「ありがたい」なかで 生きている。

船橋教会 井畑匡史さん

平成26年12月、井畑匡史さんは子供を抱えて離婚、その翌日にはタバコの火の不始末で自宅を焼失。どちらも妻が原因だった。家族、住宅と家財道具の一切を失い、妻への怒りが募った。そんなとき、仏教の視点に立った苦のとらえ方や生き方を学び、自らを省みる機会を得た。すると、仕事をするのが男の役目で、家族を犠牲にしても仕方がないと思ってきたことが、自己中心の考え方だと気づいた。子育てや家事に追われていた妻へ申し訳ない気持ちになった。さらに、火事の後始末に奔走しているとき、親身に寄り添ってくれた仏教の教えを共に学ぶ仲間、友人たちに思いが至り、「すでに『ありがたい』なかで、私は生きている」と実感。その存在に後押しされるように前を向き、「ここからがスタートです」と力強く歩んでいる。



「ありがたい」といえる幸せ

災害に見舞われた地域の復興に協力するボランティアの人や、新型コロナウイルスに関連して、懸命に尽力される医療従事者のみなさんの姿を報道などで見るたびに、敬意とともに感動を覚える人も多いのではないだろうか。それは、苦しむ人を助けたいという医療従事者と同じ気持ちだが、私たちにもあるからです。実際に行動していなくても、善い行ないに心を打たれたとき、自分はどうそこに参加しているのです。あとは、その思いをどう体現するか、ということかもしれません。

とはいえ、人それぞれに個性も違い、気力・体力や立場も違いますから、人によつてできることは異なります。ですから、たとえば、だれもがスーパーボランティアといわれるような方のまねはできないでしょう。ただ、感動や歓喜を生きる力に変えたり、すばらしいできごことに出会つて「ありがたい」と感謝したりできるのは、人間独特の感性といわれます。

その感動と感謝が凝縮された一節が、法句経の「人の生を受くるは難く、やがて死すべきもの。いま生命あるは有り難し」でしょう。命をいただき、いまここに生きる人間の本質的な喜びを素直に人に伝えていくとき、まことの幸せが広がるのです。

立正佼成会